

## 論 文

## 歯科衛生士学科1・2年次における「早期臨床体験実習」の効果

天池千嘉子<sup>1</sup>, 本間和代<sup>1</sup>, 平澤明美<sup>1</sup>, 江川広子<sup>1</sup>, 渡邊美幸<sup>1</sup>, 計良倫子<sup>1</sup>, 小林 梢<sup>2</sup><sup>1</sup>明倫短期大学 歯科衛生士学科 <sup>2</sup>明倫短期大学 附属歯科診療所

## The Effect of Early Clinical Exposure of the First and Second Year Students in Department of Dental Hygiene

Chikako Amaike<sup>1</sup>, Kazuyo Honma<sup>1</sup>, Akemi Hirasawa<sup>1</sup>, Hiroko Egawa<sup>1</sup>, Miyuki Watanabe<sup>1</sup>, Tomoko Kera<sup>1</sup>,  
Kozue Kobayashi<sup>2</sup><sup>1</sup>Department of Dental Hygiene and Welfare, Meirin College<sup>2</sup>Meirin College Dental Clinic

本学歯科衛生士学科では歯科医療現場および歯科衛生士の役割を早期に理解し、その後の学習意欲を高めることを目的に、入学2ヶ月後から早期臨床体験実習 (Early Clinical Exposure) を本学附属歯科診療所で行ってきた。

本実習は、一般目標および到達目標を掲げ、Ⅰ期 (1年前期)・Ⅱ期 (1年後期)、Ⅲ期 (2年前期) の3期に分けて行った。各実習終了後、学生に4段階 (A:自分でできた, B:少しの指導を受けてできた, C:常に指導を受けてできた, D:指導をうけてもできなかった) の自己評価および、実習に対する感想について調査した。その結果、Ⅰ・Ⅱ期 (1年次) の自己評価では「正しい実習スタイル」, 「歯科医師と歯科衛生士の会話」などの理解度の評価が高く、自分で考え、行動する内容の「診療所の構造」の理解の評価は低かった。Ⅲ期においても「見学態度」や「患者・スタッフに対する挨拶」の実行度の評価は高かったが、「使用器材の名称と用途」の理解度の評価は低かった。また、実習を通した感想からは、歯科衛生士を目指す者の自覚が芽生えたと同時に、日頃の講義・実習の重要性を毎回、実感していることがわかった。

キーワード: 歯科衛生士学科学生, 早期臨床体験実習

Keywords: Students of Dental Hygienist, Early Clinical Exposure

## I. 緒言

早期臨床体験実習は1985年に医学教育において、医学生に早期に学習への動機づけをすることを目標に導入され、以降、多くの大学で広く取り入れられるようになった。1995年には、当時の文部省が医学教育等の改善・充実と医療技術者の養成について「アーリー・エクスポートの導入などカリキュラムや教育方法の改善を進める。」と提示している<sup>1)</sup>。これを受け、看護師や歯科衛生士などの医療職養成機関においても取り組みが始まった。また、平成24年3月に全国歯科衛生士協議会の作成した「歯科衛

生学教育コア・カリキュラム-教育内容ガイドライン-」のなかの臨地・臨床実習プログラムにおいても「早期 (1年次) に臨地・臨床現場の見学実習を組むことが望ましい」と提唱されている<sup>2)</sup>。

これらの背景の下、本学では学生に歯科医療現場および歯科衛生士の役割を早期に理解させ、その後の学習意欲を高めることを目的に、平成10年度より「早期臨床体験実習」を実施してきた。その取り組みの効果について検証した。

## II. 対象および方法

対象は平成23年度に本学歯科衛生士学科に入学し

た女子66名とした。調査は本学附属歯科診療所において、Ⅰ期（1年前期：平成23年6月～7月）、Ⅱ期（1年後期：平成23年12月～24年3月）、Ⅲ期（2年前期：平成24年5月～7月）の3期に分けて（1グループ2～4名、60～90分）実施した。各実習終了後、表1・2に示すとおり、一般目標に基づく到達目標の評価を、学生自身が4段階（A：自分でできた、B：少しの指導をうけてできた、C：常に指導をうけてできた、D：指導をうけてもできなかった）で行った。さらに実習を通しての感想を調査し、それらより本実習の効果について検証した。

表1. Ⅰ期・Ⅱ期（1年次）早期臨床体験実習の一般目標および到達目標

【一般目標】	
Ⅰ期	歯科診療室の構造や歯科臨床現場における歯科衛生士の役割を理解し、歯科医療従事者となるための今後の課題を見つける。
Ⅱ期	歯科臨床現場を体験し、2学年の専門科目履修意欲を助長して、臨地・臨床実習開始までの課題をみつける。
【到達目標】	
Ⅰ期・Ⅱ期	<ul style="list-style-type: none"> <li>正しい実習スタイルができる。</li> <li>待合室・受付・ブラッシングコーナー・診療室・消毒コーナーの構造が理解できる。</li> <li>患者と歯科衛生士の会話を聞き取れる。</li> <li>歯科医師と歯科衛生士の連携を理解する。</li> <li>受付から診療終了までの患者・歯科衛生士の動きがわかる。</li> </ul>

表2. Ⅲ期（2年次）早期臨床体験実習の一般目標および到達目標

【一般目標】	
10月からの臨床実習開始にあたり、歯科臨床現場での歯科衛生士の役割を具体的に理解し、今後の課題をみつける。	
【到達目標】	
<ul style="list-style-type: none"> <li>患者・スタッフに対して挨拶ができる。</li> <li>患者・スタッフに対して正しい見学態度がとれる。</li> <li>患者誘導ができる。</li> <li>使用器材の名称と用途がわかる。</li> <li>診療内容の概要が理解できる。</li> <li>診療の後始末ができる。</li> <li>歯科診療補助での歯科衛生士の動きが理解できる。</li> </ul>	

3期の早期臨床体験実習の流れを表3に示す。Ⅰ期・Ⅱ期は歯科衛生士教員が実習スタイルの確認、見学態度等の指導を行った後、附属歯科診療所において実習を開始した。また、Ⅲ期の実習はユニット操作、患者誘導等の事前訓練を行った後、附属診療所において実施した。

表3. 早期臨床体験実習の事前訓練および見学・実習内容

	Ⅰ・Ⅱ期	Ⅲ期
事前訓練	<ul style="list-style-type: none"> <li>実習スタイルの確認</li> <li>実習目標の設定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実習スタイル確認</li> <li>ユニット操作実習</li> <li>患者誘導相互実習</li> </ul>
見学内容および実習	<ul style="list-style-type: none"> <li>診療室の構造の把握</li> <li>治療見学</li> <li>体験実習のまとめ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>患者誘導</li> <li>ユニット操作</li> <li>歯科治療見学</li> <li>歯科診療補助体験</li> <li>後始末</li> </ul>

### Ⅲ. 結果

#### 1. Ⅰ期到達目標に対する自己評価

Ⅰ期の到達目標に対する自己評価は図1に示すとおり、Aの評価が最も高かったのは、「正しい実習スタイル」の54%で、次に「スタッフ（歯科医師と歯科衛生士）の連携」の52%、「スタッフの会話がわかる」の35%と続いた。逆に、評価が低かったのは「診療室の構造（の理解）」および「歯科衛生士の動きがわかる」の各々14%であった。

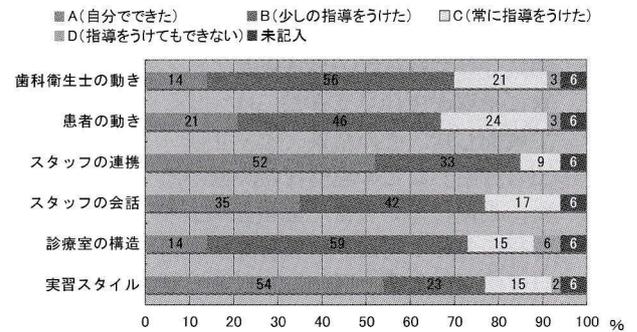


図1. Ⅰ期の到達目標に対する自己評価 (n=66)

#### 2. Ⅱ期到達目標に対する自己評価

Ⅱ期の到達目標に対する自己評価は図2に示すとおり、Aの評価が高かったのは、「スタッフ（歯科医師と歯科衛生士）の連携」の81%で、次に「正しい実習スタイル」の71%で両者とも29%、17%と増加した。逆に、評価が低かったのは、「診療室の構造（の理解）」の17%でⅠ期とあまり変化がみられなかった。

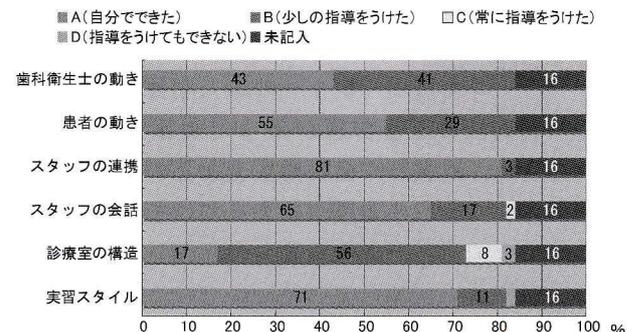


図2. Ⅱ期の到達目標に対する自己評価 (n=63)

### 3. Ⅲ期到達目標に対する自己評価

Ⅲ期の到達目標に対する自己評価は図3に示すとおり、Aの評価が高かったのは、「患者・スタッフへの態度」の84%で、次に「患者・スタッフへの挨拶」の77%であった。逆に、評価が低かったのは、「器具の用途」の5%、「器具の名称」の3%であった。

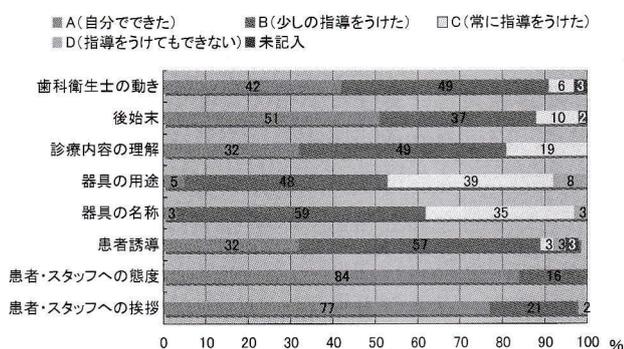


図3. Ⅲ期の到達目標に対する自己評価 (n=63)

### 4. 早期臨床体験実習での学生の主な意識変化

早期臨床体験実習の感想より、学生の主な意識変化を図4に示した。3期をとおして多くの学生が意識したのは「講義の重要性」の56% (Ⅰ期), 54% (Ⅱ期), 78% (Ⅲ期)で常に最多であった。また「実習の重要性」についてはⅠ期は3%で低かったのに対し、Ⅱ期は33%, Ⅲ期50%と増加した。

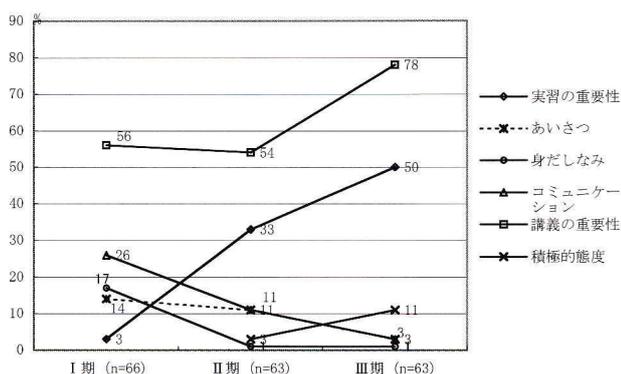


図4. 早期臨床体験実習での学生の主な意識変化 (感想より抽出)

## IV. 考察

早期臨床体験実習は臨床実習の際のストレスを減らし、自己認識と患者に対する共感的態度を育み、自信を持たせ、動機づけをし、学生の学びを促し、職業人としての自覚(役割, 責任)を促す意味で重要であると言われている<sup>3)</sup>。

### 1. Ⅰ期到達目標に対する自己評価

Ⅰ期の評価結果より、「正しい実習スタイル」のA評価が54%と高かったのは、日頃の歯科診療補助実習で厳しく指導されていることを実践できたため

と思われる。また「スタッフ(歯科医師と歯科衛生士)の連携」が高かったのは、実習経験の浅い1年生の視点からみて、両者の連携に感動したためではないかと考えられる。逆に、「診療室の構造(の理解)」の評価が低かったのは、実習時間が短かったため十分理解できなかったのではないと思われる。

### 2. Ⅱ期到達目標に対する自己評価

Ⅱ期の評価結果より、「スタッフ(歯科医師と歯科衛生士)の連携」のA評価が81%と最も高くなったのは、実習にも慣れ、両者の動きやコミュニケーションなど細部を見る余裕ができたためと思われる。また、「正しい実習スタイル」がⅠ期に比べ71%に増加したのは、医療現場では患者に不快感を与えない実習スタイルで臨まなければいけないことを自覚したためと思われる。逆に、「診療室の構造(の理解)」がⅠ期とあまり変化なく低かったのは、目先のことに注目し、全体を見渡す余裕がなかったためと思われる。

### 3. Ⅲ期到達目標に対する自己評価

Ⅲ期の評価結果より、「患者・スタッフへの見学態度」がA評価84%と高かったのは、診療現場の緊張感や厳しさなどを認識したためと思われる。逆に「器具の用途」が5%、「器具の名称」が3%と評価が低かったのは、基礎では一通り学んでも臨床体験がないことから、実力につながらなかったため、予習の必要性を痛感したのではないかと考えられる。

### 4. 早期臨床体験実習での学生の主な意識変化

学生の感想よりまとめた意識変化では、3期を通じて講義・実習の大切さを認識し、その後の学習に積極的に取り組むことの重要性を自覚する機会となったことが伺える。挨拶などの評価がⅡ, Ⅲ期に下がったことは、Ⅰ期の実習において十分目標を達したためと思われる。

## V. 結論

1・2年次に実施した早期臨床体験実習評価より次のことがわかった。

1. 1年次は歯科衛生士と患者および歯科医師との連携や挨拶など、人とのコミュニケーションの大切さを歯科衛生士の働く姿から学んだ。
2. Ⅲ期の2年前期は臨地・臨床実習を直前に控えているため、実習への不安や焦りも伺えたが、学習意欲を失う感想はなく、講義や実習の大切さを実感し、学習意欲を向上させるのに役立った。

3. 早期臨床体験実習は歯科医療および歯科衛生士の役割を理解するのに効果があった。

#### 文 献

- 1) 文部省：平成7年度我が国の文教施策：254-255, 1995  
<http://www.mext.go.jp> (2013.8.1閲覧)
- 2) 全国歯科衛生士教育協議会：歯科衛生学教育コア・カリキュラム-教育内容ガイドライン-. 日衛教育誌 3 (2) : 55-104, 2013
- 3) Littlewoods S: Early practical experience and the social responsiveness of clinical-education:systematic review.BMJ331:387-391, 2005
- 4) 堀田正人, 北後光信, 松岡正登ほか：早期臨床実習を受講した学生へのアンケート調査とその評価. 岐歯学誌 39 (2) : 48-52, 2012
- 5) 浅井直美, 小林瑞枝, 荒井真紀子ほか：看護早期体験実習における学生の意味化した経験の構造. KitakantoMedJ 57 : 17-27, 2007